蘇軾における「東坡」の意味

正木，佐枝子
九州大学：非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9661

出版情報：中国文学論集. 25, pp.55-72, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：
蘇軾における「東坡」の意味

正木 佐枝子

...
白樂天，忠州刺史なりと自名し、「東坡」の詩に題を置く詩あり。白居易詩を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾忠州に題を付せんとせんと、このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、苏文忠公軒が少し許可せず、自居易の力を名乗考えず、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、苏文忠公軒が少し許可せず、自居易の力を名乗考えず、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易は自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大は、自居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ自居易だけを敬愛し、その詩を書いた時、自居易是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。このように周必大是自居易を題に東坡に題を付せんとせんと、蘇軾の詩を名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず、自居易の詩を名乗考えず、蘇軾の詩名乗考えず。
のは、その消憂のためだったであろう。

ここで注目に値するのは、これらの詩のうちに、単なる植花や消憂以外の心情が現われていることである。まず

「東坡に花を穂う」其二詩では、

養樹既如此、養民亦何殊。

このように植えられた桃李がやっと大きく成長してきた、その樹に後髪を風が揺らす美しい景色を語る詩である。

二年留滞在江城、草樹禽魚盡有情。

二年間江城に滞在し、草樹禽魚に深い情愛を感じる詩である。

何處殷勤重避事、東坡桃李種新成。

何處で殷勤を重ねて首を廻らす、東坡の桃李が新たに成長している事に注意を払う詩である。

このような「東坡に種はし花樹に別」両絶詩は、応試に別れ

其一詩にいう、

を告げ、尚書司門員外郎として朝廷に返り咲こうとして詠んだものである。其一詩にいう、

二年留滞在江城、草樹禽魚盡有情。

二年間江城に滞在し、草樹禽魚に深い情愛を感じる詩である。

何處殷勤重避事、東坡桃李種新成。

何處で殷勤を重ねて首を廻らす、東坡の桃李が新たに成長している事に注意を払う詩である。

このように白居易の詩に「東坡」の文字が登場する時、読者は、白居易の政治的遭遇を思い浮かべるだろう。また、「ものは花に対し（以下略）」詩は、後に白居易が曲中有花を見、かつて忠州の東坡に植えた花を思い出し詠んだものである。

そこで蘇軽が借地に「東坡」と名づけ、『東坡八首』詩を詠み、「東坡居士」と名付けたのである。

蘇軽が日頃白居易の文学を敬慕していたのは確かである。しかし、ここに蘇軽が『東坡』を用いて命名した所以

蘇軽における『東坡』の意味（正本）
中国文学論集
第二十五号

は、それだけではなく、また単に同じ乾燥的な気の自分を古人に比してみたというだけでもなく、より積極的に、自

筆者在のように考えるのは、ふたつに理由がある。まずその第一は、蘇軾が黄州流寓時期に儒教経典に注釈
を施した。その動機にある。蘇軾がこの時期に『易伝』と『論語說』を執筆したことは、従来あまり注目されてい
ないようである。そこでその動機について考察してみたい。蘇
軾は『易伝』と『論語說』のうち、既に装丁のできえた『論語
説』五巻を當時の権力者に送った。以下の書簡はその

多難に窮苦し、疲労期期すべからず。恐らくはこの書一冊を読むとき、傍ざららむ。意を密に書して人間
に留めむと欲す。念ふに新たに文字を以て罪を得ば、人
必以て囚不祥の書となし、収蔵を肯へんずるな
からむ。又自ら一代の偉人をなされば、託するに足らず、以て必以て傳へむとさば、之を明公に献ずるにしくは
なし。中略

この書簡の宛名は、文路公とするなら文彦博であり、元豊年間に西京の太尉留守を務めた権貴の者である。もとと
文彦博は権密副使、収蔵政事を務める中央の官僚であったが、王安石と対立して地方官に歴任し、一時は外に在る
とえども、帝春の加ふる有りに。文路公に対して還書として、文簡を以て返書とした。文中に当世の偉人でなければ託すことはできない、託すのであれば、あな
ただけ、というのは、王安石に対立した文彦博の経験に、蘇軾自身のそれを重ねての謂いであろう。そもそも当時
の人は幼時からの目標として、科挙に及第し官吏になり経世濟民の政治に參與することを掟げていた。蘇軾も例外で
はなかった。しかしこ、蘇軾は政治的権力を剥奪されたのである。その煩問は並々ならぬものがあったであろう。
そして蘇軾はなおも士大夫として生きようとは、しかも自分が士大夫として生きていることを他人に知ってほしいと願い、儒教経典に注釈を施して、わざわざ中央の官吏にそれを送り、その後態度を表明しようとしたのである。な

次に、筆者が蘇軾の『東坡』の命名には朝廷復帰願望があると考える第二の理由は、蘇軾が黄州を去って二年後、翰林院学士知制誥に任ぜられた時、すなわち朝廷に返り咲いた時、蘇軾自ら『経歴的に自分は白居易に聞く似てゐる』といってゐるからである。それは以下の詩である。

蘇軾は詩中の『鉄石心』を黄州時期の書簡の中でも使っている。すなわち、蘇軾の友人李公佑が蘇軾の詐謗を慰め

"微生偶脱風波地、晚歲猶存鐵石心。
定似香山老居士、世緣終淺道根深。
定命似儒山居士、世緣終淺道根深。
定自注（前略）、蘇軾是白居易と自分の経歴をそれぞれ述べる。

の翁の晩節の瞑適の楽を享けることを。

蘇軾における『東坡』の意味（正木）
得，官吏として一生を全うしたいと願うのである。　

以上のように蘇軾は、自従もまた士大夫としての生き方を全うしたいという、並々ならぬ儒家思想がある。そして自居易の歴史に自分のそれを重ね、晩年の関西の楽しみをも得たいと願ったのであった。そこで筆者は、蘇軾が黄州流謫時期において「東坡」を借地名とし、また「居士」名に「東坡」と名号していたのは、自居易の文学者の道を敬慕し、自居易と同様に朝廷に復帰したいと、密かに切望していたことによるものと考える。

では、蘇軾はなぜ仏教の在家信徒の表明である「居士」と称したのであろうか。ここでは、「居士」名に「東坡」を付したことではなく、「居士」と称したこと自体に重点をおいて論じることにする。すなわち、蘇軾の黄州流謫時期における宗教への傾倒を、従来の研究結果を踏まえながら略述し、各種の問題点も述べよう。二

深く自ら省察すれば、則ち物我相忘れ、身心皆な空にして、罪垢の従って生する所を求むるも得べきからるより、養生のためであったようである。注目に値するのは、蘇軾が、これらの安国寺を、道真に築いた。これに即ち、前出の研究結果を検証し

また蘇軾は道教にも興味を示した。元寶三年、すなわち、黄州に到着した年の暮れに道真に築いた。これは思索す

— 60 —
でこう大夫としての態度を明示したり、後述のように自重を表明したりする公的立場を維持した。それに伴う緊張状態を和らげ、精神の均衡を保ち、身心の疲労を防ぎ、日々を送り過ごすために、私的立場において積極的にとっ
た手段といえば、

六客とは、蘇軾及び詩題にある元素すなわち楊経の共通の友人達であり、この時或はは既に没し、或る者も遠方
にいる。そこでこの詩句の内容は「友人達の存亡をもって、六人の友人を悲しませないでくれ給え、私はすでに地
獄も天宮に等しい悟りの境地にいるのだから」ということである。この「地獄も天宮に等しい」とは、仏教経典
に見えるように、「念仏する男子はついに死ねば、地獄も天宮も皆な浄土にして感じる」という境地に他ならない。}

在東坡における「東坡」の意味

以上のことを考えあわせると、「居士」と称したからには、蘇軾に宗教上の変化があったのだろうと考えるのは、自然
では，

しかし同時に，この考えが文献上不確かな面を持つこと，明らかにしておかなければならない。まず第一に，

蘇軾はこの時期に『居士』と称し明言していることも，

また從来の研究では，蘇軾が仏教に傾倒し，悟りの境地に至ったことを，前掲の「黄州安国寺記」に根拠を求め

ていた。しかしこの記には，自分の体験（前掲の記述を含む）を述べた後，寺の僧締紹の逸話を述べ，さらに以下

の説明が加えられている。

七五，余将に汝への行に臨むあらむとす。連日，

『寺には未だ記有らず』石を具へ之に記きむことを

つまり，この記は蘇軾が自発的に書いたものではなく，安国寺の僧締紹に委託されて書いたものである。そのよう

な場合，仮に蘇軾が寺で何も得ることがなかったとしても，それを真率に告白できるであろう。寺で「身心皆な

空」になったと述べるのは，多少の誇張が含まれていないだろう。この記をもって蘇軾が仏教の信仰を深めた

と考えるのは，早計にすぎるだろう。

さらに，蘇軾が記した前掲の墓誌銘のうち，後半の『後に釋氏の書を読み，深く實相を悟り（以下略）』の一文

は，出所の疑問がある。南宋・施元之の『施註蘇詩』に載せる「墓誌銘」には，記していないが，施元之註は，

『絶句を読むに悟った』と，確かに蘇軾の言葉である。

仰を深めたといえよう。
三

ではここでの観点を変え、宋代朝廷の仏・道教政策について考えてみたい。既に知られているように、宋代朝廷はその建国時期から積極的に仏教と道教を治政に取り入れ、例えば出版物からそれを確かめると、主なものを拾いだすだけでも、宋代朝廷は、太祖開宝四年（九七一年）に仏典の集大成である『大藏経』を出版した。また太宗は、太祖との対立を避けて、真宗天禧三年（一〇一九年）には道教政策を改め、太宗が集大成である『大藏経』を七巻を成した。これらの在唐の全国家政策の成果である。

また、政令によって道教の動きをみる。太祖、太宗、真宗の道教政策は、より細かく、道教政策についての詔令を発している。これらの詔令の後に仏・道教関係の詔令を発しているのは、道教趣旨を知るうえに仏教的性格を知るうえに仏・道教政策は、道教の教義に従ったと書かれている。

このように仏・道教を有効的に利用しようとする政策の下に、活動していた士大夫だったのち、蘇軾が正木の意味である。
上述述べてきたように、筆者は「蘇軾が借地名と居士名に「東坡」と命名したのは、自居易の文学を敬慕した

実際にはこの記述に反し、蘇軾は黄州の赤鼻磯に遊び、「前賢赤壁賦」を詠んでおり、また、友人にも手紙を書いて

自重しているかを印象づけようとした。そこには、党争に巻き込まれて罪を得ても、いかに生き抜くかを知っ

ている。蘇軾のしたたかな姿勢が窺われるのである。
ことに加えて、特別な思い入れ、すなわち朝廷復帰願望があると考える。そこで本章では、蘇軾が黄州流謫時期に
詠んだ、有名な『東坡八首』詩の内容と、このことがいかに関わるかを考察してみたい。
まず『東坡八首』詩の読解から始めよう。思うに『東坡八首』詩の最大の特徴は、蘇軾がその創作を通じて、苦
悩から希望へと一大転機を迎えることにあろう。そこで、該詩の挿句の内容についてみてみよう。

すなわち、①制作年代は、黄州に到着してから二年目。②当地では日々の生活が困窮していった。
③友人馬正卿が兵営の跡地を借り受けてくれた。④借地は荒れ放題であったが、蘇軾自ら耕作し、来秋の収穫
を願っていることを、が分かる。次に、紙幅の制限により、八首のうちその一、七、八を掲げ、その他は大意を紹介
する。

其一

1 廃_mx人顧
2 頓曠瀰蓬蒿

廃滅者の顧みる無く、蓬草に満ちる。

11 問然述未數
12 我廐何時高

聞然として未を詠って歎す、我が農。何れの時にか高からむ。

蘇軾における『東坡』の意味（正木）
土地の高低によって耕作に適した作物がある。近隣の農民が桑の実を分けてくれる。そのうち我が家を築こう。

早朝のため両も潤れて耕作が困難であったが、昨夜の雨が降り、屋の中には芽が芽生え、夏には葉先が風に翻り、秋には実りがであろう。やくゆ

清明年前に稲の種を蒔く。やって春には苗が芽生え、夏には葉先が風に翻り、秋には実りがであろう。やくゆ

其四

稲の地方からいえば、ここが十年荒れ地だったのはむしろ幸いであった。桑の木はまだ大きくならないが、麦

其五

は期待できそうだ。農民が「蚕の苗を牛羊に働く踏ませよ」と助言してくれた。私はその言葉に感謝する。

其六

1. 湧子久不調
2. 沖田江南村
3. 郭生本将植
4. 賈楽西市垣
5. 古生有志常
6. 恐是押牙孫
7. 家有一矢竹
8. 無時容叩門
9. 我窮交舊絶
10. 三子獨見存
11. 我於東坡
12. 勞郭同絶

我在東坡に従ひ、勞郭同絶。
可憐杜拾遺，四事與朱阮論。

憐むべし。杜拾遺の、事・朱・阮と論ずるを。

吾師卜子夏，四海皆弟昆。

卜子夏を師とし、四海皆弟昆となる。

可憐杜拾遺，四事與朱阮論。

憐むべし。杜拾遺の、事・朱・阮と論ずるを。
中国文学論集
第二十五号

次に、蘇軾に希望を寄したのは、該詩八首に登場する人々である。まず其三詩、6句で、蘇軾は自分自身を孤
獨で過酷な状態にあらわる人々を認識していたが、其三詩、6句「江南有蜀士、桑果已許詩。」一で、近隣の同僚に桑果
を食べ、蘇軾に協力してくれた人々を誇る。そして其七詩で、自分に近づいてくれた無名の三人を長々と紹介し、
「吾師子夏、四海皆弟昆」。と読む。『孔子の弟子である卜商（字子夏）がいうように、世界の人々を交
際して、蘇軾に莉かを受けてくれる人々を誇る。そして其七詩で、自分に近づいてくれた無名の三人を長々と紹介し
のようになる。そうすれば孤獨ではない。』と、高らかに宣告するのである。この三人の名は、市井の人々で
ある。しかしそれは単なる謝辞だけではなく、蘇軾が、自分に協力してくれる身近な人々から、より広く世界の人
と兄弟のようになって、宣告する。その過程の綺麗した存在を表現している。つまり三人は、血縁縄縄縄縄縄縄縄縄縄縄縄縄
と誇れるのである。其八詩は、その宣言の余波のように、馬正卿のためだけに一首を割き、9と12句のように、
たた馬生に感謝し、怒募気に溢れ、叙文に述べた。馬生の援助を得て開催に至ったことに対応して、結びとす
るのである。

さてここで、蘇軾に希望を寄した第三の点を考察するために、視点を変えて、該詩の土台を構成するものから考
えてみよう。その土台とは、空腹である。其十一、12句で来を、其三詩13、16句「泥底有宿根、一寸噬独在。雪草何時動、春
場行可膽。」で芥と鴨肉の和物
で一食の糧と水を、其三詩13、16句「泥底有宿根、一寸噬独在。雪草何時動、春
場行可膽。」で芥と鴨肉の和物
を、其四詩17、18句「行當知此味、口腹吾已許。」で新米を、
其三詩13、16句「泥底有宿根、一寸噬独在。雪草何時動、春
場行可膽。」で芥と鴨肉の和物
「得飽不敢忘」で飽餓を、其六詩11、12句「遠遊三十日、照座光華땡」で大蜜栄を、其七詩11、12句で一飯を
それぞれ詠み、各詩が食物に関する内容となっている。それは飢えた者がさりに食物のことを使おうであり、
かつて中央官吏であった蘇軾ほどの人物が、流議前と大きな落差のある生活を強いられていることが思われる。と
前述のよう、天候が蘇軾に味方したことは、蘇軾にとって確実に有り難いことであったが、それは蘇詩の背景
にすぎず、主眼ではない。その主眼とは、孤獨な旅人か、身近な人から徐々に範囲を広げ、広く人々の協力を得て、
ついに世間の人々皆と兄弟のようなになるようと宣言し、以後は孤獨ではないという喜びを表現したこと、つまり、
詩八首全体を通じてその願な心を溶かしてゆく過程と結果にある。振り返ってみれば蘇軾は、八首詩を
まるで、八首全體の構成上の一組といえる、その孤獨な旅人という認識の
ある蘇軾が、今まで述べてきた変化を遂げたのは、人々の協力という温かいためであろう。蘇軾は、八首詩では食物
を詠まず、また、八首全體の構成上の縮みくくりとして、八首詩を叙文と対応させ、叙文で言及した馬を再び登
場させ、さらに、其一詩「一寸の毛を割らむ」と欲す、を受け、其八詩で「毛を龜背の上に割ぐに、何れの時
にか成醚を得む」、とモラス的に、一人としての態度を取り戻し、単なる空腹の詩ではなくなしたのである。
このように「東坡八首」詩は、いかにも蘇軾の顕達さを表わす、代表作ともいうべき作品である。東坡八首は、仏道書
に思想のなかに、仏教や道教の聖典を出典とする詩句は提出者たちの
意義ある、宗教に関連のありそうな詩題であるにも関わらず、
「東坡八首」詩としての応用のありそうな、役に立たないと嘆き、
該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、該詩詠んだ後は次第に仏教に
傾倒するさまが窺われる。と
一方で、蘇軾は仏・道教書から引用を好んで詩に詠

中国文学論集
第二十五号

無法者で今にも身を滅ぼしてしまうため、弟の司馬牛が憂えていた，
「人には皆な兄弟があるのに、私だけにはいない」。そこで卜商が，
「死ぬも生きるも定めがある」と聞いている。あなたの兄さんのことも仕方がない。しか
し孔子は慎んで落ち着きが無く，人と交際するのに礼を守っていて，
どうして実の兄弟がいないことなど気にかけようか，というのである。

蘇軒は『東坡八首』詩の中で，宗教ではなく，自分が幼い頃から暗記して，
肌に染みついている『論語』を思い出し，その『東坡』を仏教仏教の名にしたのは，仏教の成功
すなわち朝廷復帰への方徳をも含むのである。『東坡居士』の名号に確かに行為に示す方徳がある。
蘇軒に仏・仏教の影響がある，

最後に蘇軒の生涯を通して考えてみたい。王水照氏は蘇軒を論じて，
『仏教思想』がその根本にあるが，仏教仏教の成功

おわりに

注
底本は、清・王文華輯註、孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、一九九三年第三次印刷）を用いた。

1. 蘇軾忠武詩注集成総案十一
2. 陸次恩『蘇軾語家語家』台湾学生書局、民国七十九年、二〇〇頁では、当時『居士』とは仏教徒も道教徒も称し、在家の仏教徒と考える。というのも、蘇軾が書いた『元子瞻端明墓誌銘』に、蘇軾が没した時の様子として『太學院士たちが仏僧に施した』という、また、蘇軾の散文は、道教よりも仏教について書かれたものが多く、多い。
3. 『宋史』巻三百一十三文臣编伝。
4. 岩波書店、一九九三年第十五刷、一〇〇頁。
5. 蘇軾以去歲春夏、侍立延英、而秋之交、子由相繼入侍、次詔極玫四首、各述所懷。
6. 七分老少、大略相似。庶幾復此翁晚節風騨之樂焉。
7. 忘道、老而能學也。
8. 『宋史』巻三十一文臣编伝。
9. 某啓。示及新詩。皆有遠別惘然之思。雖兄之愛我厚，然僕已以鐵石腸待公，何乃爾耶。吾懸雖老且窮。而道理貫心。肝、志義疎骨髓、直須讀矣。死生之際、中略、兄雖懷稿於時、遺事有可尊主澤民者。便忘讖為之。煖福得喪。
10. 蘇軾における『東坡』の意味（正木）

深自省察、則物我相忘、身心皆空。求死垢所從生而不可得。